

氏 名	おかもとまさひろ 岡 本 雅 博
学位(専攻分野)	博 士 (地域研究)
学 位 記 番 号	地 博 第 58 号
学位授与の日付	平 成 20 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	ア ジ ア ・ ア フ リ カ 地 域 研 究 研 究 科 ア フ リ カ 地 域 研 究 専 攻
学 位 論 文 題 目	ザンベジ川上流域の氾濫原における生業複合の可塑性と持続性 ——西部ザンビアのロジ社会を事例として——

論文調査委員 (主査) 教授 掛谷 誠 教授 太田 至 准教授 伊谷 樹 一

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、ザンベジ川の上流域に広がるバロツェ氾濫原に居住するロジを対象として、農業・牧畜・漁撈などの生業複合の実態と近隣の民族との相互関係に焦点を当て、生態環境や近年の社会・経済的な変化への対応の特性を論じている。

序章では、先行研究をレビューしつつ、本研究の背景と目的を述べ、バロツェ氾濫原とロジ社会の特徴を、その外縁に広がる乾燥疎開林（ミオンボ林）帯を視野に入れて概観している。ロジは、バロツェ氾濫原の中心域に居住し、農業・牧畜・漁撈・狩猟・採集などの多生業を営み、ミオンボ林帯で焼畑農耕を営むアンゴラからの移住民・避難民と交易などをつうじて親密な社会関係を築いている。それは、バロツェ氾濫原を本拠地としたロジ王国の歴史を背景としている。

第1章では、17世紀に基礎ができ、多民族を包摂して発展してきたロジ王国の歴史をたどり、現代ロジ社会の存続の基盤を考察している。ロジ王国は、19世紀以降の西欧列強との接触期にも、ロジ王の巧みな外交交渉によって体制を維持したが、1964年のザンビア独立時に王国は国家の枠組みに取り込まれ、制度的には廃止された。しかし、在来の土地保有のシステムなどは存続し、それらがロジによる氾濫原の独占的な利用を支え、アンゴラからの移住民・避難民との生態域を住み分けた共存を可能にしていると述べている。

第2章では、バロツェ氾濫原の生態環境の特徴とロジの環境認識を論じている。ザンベジ川は、ロジが洪水期と呼ぶ2～5月に最高の水位になり、低平なバロツェ氾濫原の一角が冠水する。ロジは、比高差などを基準として地形を詳細に認知・分類し、水環境の変動に対処していることを明らかにした。

第3章では、氾濫原の微高地や微凹地の耕地を使い分け、主食用のトウモロコシやサツマイモなどを栽培している農業の特性を論じている。洪水期にも冠水しない微高地の畑地は特に重要で、牛囲いを移動させ、牛の糞尿による施肥で地力を維持している。また近年、ミオンボ林帯でキャッサバ栽培を始めるなど、多様な農法を組み合わせ、生態環境や時代の変化に対応している実態を明らかにした。

第4章では、氾濫原での牧畜と漁撈について詳細に記述・分析している。牧草と水場に恵まれた氾濫原では、古くからウシの牧畜が盛んであった。ウシの糞尿は耕地の地力を保ち、犁耕は農業労働の基幹部を担うなど、農業と牧畜は密接に関わってきた。洪水期に、ロジの人々はウシをミオンボ林帯に移動させていたが、その放牧管理をミオンボ林帯の住民に預託するシステムを築いていった。ロジは年間をとおして多彩な漁法で漁撈に従事し、その漁獲は主要な副食源であり、貴重な現金収入源でもあった。大洪水時には、農業が被害を受け不作になるが、魚との交換で農作物を入手してきた。このように、多生業の併存をベースとした生業複合が氾濫原の生活を支えてきたことを示した。

第5章では、生態環境の変動や、近年の社会・経済的な変化への対応について論じている。ロジは、1950年代以降、隣国アンゴラの内紛から逃れてミオンボ林帯に移住してきた多くの避難民との緊密な関係を築き、洪水期にウシの放牧管理を預託し、物資の交易を進め、2000年頃に流行した牛肺疫による役牛の減少を背景として、彼らの焼畑農耕によるキャッサバ栽培を積極的に取り入れていった。また2000年以降に大洪水が頻発し、しばしば農業の不作にみまわれたが、大洪水は多くの

漁獲をもたらし、ロジの人々は漁撈に力を注いだ。そして、調査地域に隣接し、政府による大規模な農地開発が進むカオマ県に漁獲物を運び、トウモロコシと交換して食糧の不足を補った。こうしてロジは、氾濫原における在来の生業形態と、他の民族や地域との交流を基盤としつつ、生態環境や社会環境の変化に対応してきたのである。

終章では、バロツェ氾濫原における生業複合の可塑性と持続性について総合的に論じている。ロジは、農地の地力を維持し、広大な放牧地や多様な漁場を提供する氾濫原の豊かさを引き出す知識と技術を持ち、農業・牧畜・漁撈などの生業複合を持続的に保持してきた。人々は同時に、生態環境や外部の社会・経済的な変化に対して、氾濫原での各生業の比重を柔軟に調整し、外部社会との交流を強化して対処してきたと総括している。そして、ロジ社会における生業複合の可塑性と持続性は、氾濫原を本拠地とした王国時代から培われてきた基本的な生活原理に支えられていると結論している。

論文審査の結果の要旨

アフリカには広く氾濫原や湿地帯が分布し、その総面積は30万平方キロメートルと推定されており、中には集権的な王国形成の基盤となった地域もある。また水環境管理の改良による開発の可能性が模索されている地域でもある。しかし、生態環境の特異性のゆえに、氾濫原や湿地帯における在来の生業の実態や、その変化の過程についての詳細な研究は少ない。

本論文は、西部ザンビアを流れるザンベジ川上流域のバロツェ氾濫原に居住し、かつては強大な王国を形成したロジを対象とし、農業・牧畜・漁撈などの生業複合の実態と、近隣の民族との相互関係に焦点を当て、生態環境や近年の社会・経済的な変化への対応の特性を明らかにした地域研究の成果である。

本論文は、以下の三つの学術的な貢献によって高く評価できる。第一は、氾濫原で暮らす人々の環境認識と生業に関わる技術の分析を基礎にして、精緻な生活誌を描きあげたことである。ザンベジ川は、ロジが洪水期と呼ぶ2～5月に最高の水位になり、低平な氾濫原の一角が冠水する。家屋の中まで浸水するが、ロジは、このバロツェ氾濫原が豊かな恵みをもたらす地であると語り、その住民であることに誇りをもっている。彼らは、土地の比高差や水分条件などを基準にして地形を詳細に認知・分類し、水環境の変動に対処している。氾濫原の微高地や微凹地の農地を使い分け、洪水とウシの糞尿に依存して地力を維持し、1年に数回、主食用のトウモロコシやサツマイモなどを収穫する。広大な放牧地と水場に恵まれた氾濫原では古くからウシの牧畜が盛んで、牛乳の供給とともに、その糞尿による農地への施肥や犁耕など、農業と密接に関わっている。またロジは、年間を通して多彩な漁法で漁撈に従事している。狩猟や採集も行う。このように多生業の併存をベースとした生業複合が氾濫原の生活を支えてきた実態を明らかにしたことは、地域研究への大きな貢献である。

第二は、ロジの人々が、在来の知識・技術や、多民族を包摂して存続してきた王国時代から続く他民族との交流の歴史を受け継ぎ、生態環境や外部の社会・経済的な変化に対処した過程を示したことである。ロジ社会は、1950年代頃から隣国アンゴラの内紛を逃れてきた多くの避難民を受け入れ、氾濫原の外縁部に広がる疎開林帯への移住を許容し、彼らと密接な関係を築き、洪水期にウシの放牧管理を預託し、物資の交易を進めた。2000年頃に牛肺疫が流行して役牛の頭数が減少し、氾濫原での耕作面積の縮小を余儀なくされたロジは、避難民の焼畑農耕によるキャッサバ栽培を積極的に取り入れていった。また2000年以降に大洪水が頻発し、農業が被害を受け不作にみまわれたが、大洪水は多くの漁獲をもたらした。ロジの人々は漁撈に力を注いだ。そして調査地域に隣接し、政府による大規模な農地開発が進むカオマ県に漁獲物を運び、トウモロコシと交換して食糧の不足を補った。カオマ県は、かつてのロジ王国の文化圏に属している。ロジ社会における生業の可塑性と持続性は、氾濫原を本拠地とした王国時代から培われてきた基本的な生活原理に支えられており、この可塑性と持続性が変化への柔軟な対応を可能にしたことを解明した功績は大きい。

第三は、アフリカ諸民族の生業研究への新たな視点を提示したことである。部分的には農業と牧畜との関係に示されたような密接な複合形態を含みつつも、大洪水による農業の不作時には、漁撈に力を注いで食糧を確保した事例が示すように、多生業が併存し、全体の生活過程をとおしてルースに結びついた複合形態が、変化への高い適応性をもつことを立証した意義は重要である。それは、氾濫原という特異な生態環境で生きる人々の誇りに共感し、地道に積み重ねたフィールドワークの成果であると評価できる。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成20年1月29日、論文内容とそれに関連した事項について試問した結果、合格と認めた。